

日韓文化交流基金 NEWS



No.82 2017.6.28

contents

1-3 企画公募事業

2016年度韓国との間の招へい・派遣企画競争公募事業
実施団体関係者及び参加者へのインタビュー

4-5 基金講演会

日韓文化の違いと近似性—会議通訳の現場から
日韓会議通訳・放送通訳 長友英子

6-7 交流エッセイ 訪韓事業参加者感想文の紹介

宮崎県立みやざき中央支援学校教諭 門下祐子
国際教養大学国際教養学部2年 長尾緑

8-9 フェロー研究紹介

滞日本抄—旧帝国で過ごした五ヶ月の記憶
大邱大学校基礎教育大学招聘教授 鄭惠英

10-11 日韓文化交流基金事業報告

2016年度第4四半期実施事業紹介
理事会・評議員会開催

12 2017年度助成対象事業決定

2017年度訪日・訪韓フェローシップ採用者決定

2016年度韓国との間の招へい・派遣 企画競争公募事業 全24件が終了

今回は交流の成果をより継続的なものとするために情報発信などのフォローアップにも注力

日韓文化交流基金では、外部の実施団体と協力し、「2016年度韓国との間の招へい・派遣企画競争公募事業」として、2016年7月から2017年3月末までに18団体全24件の事業を実施しました。事業全体の人数規模としては、高校生から社会人の計914名（招へい775名、派遣139名）が事業に参加しました。今回は特に農業、食品に関するテーマを掲げた事業が6件ありました。また、事業終了後の情報発信をはじめとするフォローアップについて従来より重点が置かれ、各実施団体においては、計画段階から実施段階にかけて、フォローアップについても具体的な案が練られました。

なかでも、「ガイドブックにはない私の発見した日本」をテーマに韓国高校生らを対象にした訪日プログラム（国際フレンドシップ協会・国際文化フォーラム共催）では、テーマに沿って参加者が日本滞在中に見て、体験したものの中から発見した日本について、発表用資料を制作しました。韓国帰国後に参加者たち自身が所属する学校の在校生たちに伝えることを想定して作成したとのことです。高校生たち自らが発見した事柄を判り

やすくどのように伝えるか難しさを感じながらも工夫して伝えたい内容をまとめ発表を行ないました。

今号では、4つの事業の関係者にインタビューを行ない、事業内容やフォローアップの模様についてお話をうかがいましたので、ご紹介いたします。



帰国後に日本での経験を同級生たちの前で発表（韓国・東灘中央高）

1. 【招へい】 韓国のクリエイターが 秋田への思いを込めて作品制作

実施団体：秋田空港利用促進協議会

2016年10月1日～10月10日実施、

インタビュー回答者：秋田県韓国コーディネーター事務所（韓国・イン
ペインターグローバル代表）朴省姫（パク・ソンヒ）さん

日本秋田クリエイター交流プロジェクトのメンバーとして、韓国の若手芸術家らと共に東北地方・秋田を訪れました。このプロジェクトは芸術をキーワードに伝統、デザインを体感し、都市と地方、過去と未来についてクリエイターたちが体験した感覚を作品として表現することで日韓の相互理解につなげていくことを目標に行われました。参加者募集を SNS など呼びかけたところ、140 名を超す応募があり、この中から選抜された 33 名が参加しました。

訪日中、参加したクリエイターたちは、地域の人々にとってごく当たり前の日常生活の中で起こる物事に興味を持ち、伝統を大切にしながら日々感謝して過ごしている姿が印象的であったと語るメンバーもいました。

帰国後には、東北・秋田で受けたインスピレーションを反映した作品を制作し、去る 2 月にソウルの在韓日本大使館公報文化院で展示会を開催しました。一般来場者も多く訪れ、展示作品を通じて、クリエイターたちが受けた感動を共有できたようです。訪日プロジェクトにかかわった関係者の交流にとどまらず、東北や秋田に対する一般の人々の関心と好感を高めることができたことは大きな成果です。



作品名：「아키타의 밤 (秋田の夜)」, 朴智英 (パク・ジョン) 作
東北の各地で多くのインスピレーションが与えられました。特にまっすぐ、青く伸びた木々がとても美しく、秋田で見て感じた伝統的なイメージを作品で表現しました。

作品制作とあわせて、作品に込めたクリエイターの思いをまとめた冊子も作りました。冊子にはクリエイター一人一人の視点でみた観光、芸術、文化、産業などについても触れ、冊子を手にした人たちが、日本を理解するのに良い資料との評価も受けました。冊子がきっかけで 7 月に開催される慶南国際アートフェアでも展示を行うことが決まるなど、新しい交流も生まれています。

参加したクリエイターたちの分野は異なりますが、お互いの理解を通じて、新たな発展と共存を探り、さらに深い感動を創造することが出来たというところに集約できるかと思います。

2. 【招へい】 文化の創造力・発信力 (大阪から)

実施団体：公益財団法人大阪国際交流センター

2016年11月3日～11月13日実施、

インタビュー回答者：大阪国際交流センター 岡室いづきさん

情報発信力を持つ韓国大学生 33 名が来日し、「文化の創造力・発信力」というテーマのもと、次の 3 点を目的に、関西地方及び岡山、香川の各地を訪問しました。

- ①大阪のものづくりや地域再生を目指したまちづくりなどの創造的な発想と革新的な手法を学び、日本の魅力を知る。
- ②日本の大学生や市民ボランティアとの交流を通して、日本への理解を深め、持続的な人的交流ネットワークを構築する。
- ③プログラム中と帰国後、積極的な情報発信を行い、日本の魅力を対外的に発信し、日本に対する関心の促進に寄与する。

日程の中では、関西在住の大学生との普段の街あるきプログラムや、登録ボランティアを活用した日本文化体験プログラムなどを実施。ひと味違った自由な交流の場や市民ボランティアと直接交流できる機会を提供することで、相互交流が深まり、持続的な交流が図れるようになりました。

事業全体を通しては、主要な目的である情報発信に力点を置き、SNS を活用した写真コンテストと動画コンテストを実施（詳細は下記のアドレスからご覧いただけます）。コンテスト応募の作品には、日本の魅力を意識的に発見しようとする姿勢が見受けられ、情報発信の動機づけに繋がっていることが伺えます。また、情報が拡散するように働きかけた結果、SNS 上で「いいね」やシェアを自ら積極的に呼びかける投稿をたくさん目にすることができました。結果として、情報の拡散力がかなり高まり、対外的に日本の魅力を発信することができました。（実績：プログラム期間中の SNS 情報発信数 528 件、写真コンテスト受賞者「いいね」最高獲得数 452 件、動画コンテスト優秀チーム「いいね」総獲得数 992 件、再生総回数 4,396 回）

創造的な発想と革新的な手法を学ぶ都市再生プログラムの視察については、帰国後に日本の成功事例が韓国の都市再生に役に立つよう、大学の授業だけでなく、ゼミの発表や研究課題の題材などに積極的に活用し紹介をする事例ができています。また、SNS にとどまらず、写真展を開催したり、マスコミに記事を提供したりと、どれも参加者たちが自主的に日本の魅力を発信するために活動し、訪日から半年経った現在でも定期的に日本紹介を行っている学生もいます。こうした参加者による自主的・継続的な活動も本事業の大きな成果のひとつであると感じています。



<https://www.facebook.com/Jenesys2016.osaka/>

3.【派遣】食品を通しての日韓協力体制の構築と発信

実施団体：公益財団法人静岡県産業振興財団

2017年3月16日～3月21日実施、

インタビュー回答者：静岡県産業振興財団 フーズ・サイエンスセンター 岩崎正さん

静岡県内の大学生等からなる29名が韓国を訪問しました。静岡県が推進する食品関連産業の振興と健康・食に関連し、「農産品の輸出入」「食品加工と開発技術」「美と健康と機能性」「広報インテリジェンス」をテーマに、韓国・ソウルから済州島まで1537キロを縦断しながら、毎日乳業、宝城緑茶研究所、キム・ミョンソン発酵研究所、オーソルロク研究所などの機関を訪ねたほか、済州大学での交流やキムチ作り体験など行ないました。

また、本センターとしては、どのようなよい制度や設備においてもそれを動かすのは人間次第であり、そのために人も大切に育てる「人材」の育成がカギと捉えています。今回のプロジェクトは、食品関連産業へ関心の高い大学生を派遣することでさらに、知見を高めて、学生と企業が連携して商品開発や海外販路開拓などのアイデアを実際のビジネスにつなげ、地域の産業界へと還元する狙いもありました。

訪韓期間中は「人材」育成のためにも、参加者が当事者として参加できるように役割分担を与えたりしました。学生たちにとっては大変な日程であったかもしれませんが、訪韓プログラム参加後、ある学生は、「訪韓プログラムを経験してから、挑戦することの楽しさを知りました。韓国でもたくさん失敗をしました。しかし、小さなことで気にしているより、広い世界を見たいと思うようになりました。今年改めて、第2外国語の授業で韓国語を履修しなおし、来年また韓国に行くという思いで、勉強しています」といった声も聞かれ、訪韓を機にまかれた種が芽を出し、これから大きく育つと期待しています。

今後については、お茶やイチゴなどを使った製品開発と販路開拓への反映が期待されます。輸出入については関税、商慣習、食習慣の違いもあり、大きな実を結ぶには時間がかかり、すぐには正解が出ないかもしれませんが、継続的な取り組みとなるように、今回のプログラムの参加者たちが、それぞれ当事者意識を持ちながら、情報共有による共感と支持を広げていき、内外にファンをつくっていくことが一番の近道と考えます。



扶余・井洞マウル公民館にてキムチ作り体験

4.【招へい】多文化共生の現場を調査し街づくりについて考える

実施団体：東洋大学国際学部

2017年1月5日～1月14日実施、

インタビュー回答者：東洋大学国際学部教授 芦沢真五さん

人材流動におけるグローバル化、少子高齢化などで、東アジアにおいても多文化共生が社会的、政治的な課題となりつつある中で、未来を担う若者が、日韓両国が共通して抱える多文化共生について、ともに考えるという姿勢を身につけてもらうことを目的に韓国大学生36名を含む計48名を招へいしました。

実施前は、日韓の学生同士、言語、文化面でお互いに関心を持っているとはいえ、お互いに壁を乗り越えられない学生たちが出た場合にどのように交流させていくかが課題となりましたが、実際にはそのような心配はほとんど杞憂で、あっという間に学生同士が仲良くなる光景が見られました。

日程中は、川崎市国際交流センター、新宿区多文化共生プラザを訪れたほか、在日韓国人の市民の皆さんとも意見交換する機会をもつことができました。プログラムの最後には、フィールドワークなどで気づいたこと、両国での市民生活の違い、習慣や行動様式の違い、街づくりへのアプローチの違いや共通点などについて共同でポスターを作成し、ポスターセッション（発表）を行いました。その中でも、特に新宿地区の多文化共生プラザでの意見交換を中心に発表したグループが、行政アプローチの面で、新宿区の取り組みの優れた部分、両国が相互に学びあえる課題などを丁寧にレポートしており、高い評価を受けていました。

今回参加した韓国の学生の中には渡航経験も多く日本語や日本文化について非常に高い関心を持つ学生もあり、大学としてはこうした学生をロールモデルにして、より交流事業の活性化をはかっていたと考えています。日本側の学生たちの中にも、長期の韓国留学を準備している学生が数人いるほか、韓国語と韓国文化に興味を持ち、継続して学習しているグループや、Kポップのダンスサークルに取り組んでいく学生などがおり、プログラムを機に意識が更に高まっていくことを期待しています。

さらに今後は、本プログラムの経験を活かして、都市計画、街づくり、多文化共生などをテーマに、学生と教職員が協力して、海外の大学との共同授業などを検討しています。



多文化共生の現場を見て気付いた点をポスターにまとめて発表

「日韓文化の違いと近似性—会議通訳の現場から」

日韓会議通訳・放送通訳

長友英子

日韓の違いと近似性をテーマに昨年から行ってきたシリーズ3回目となり、4月26日に行われた「日韓文化の違いと近似性—会議通訳の現場から」（講師：長友英子さん）の講演についてご紹介します。

1. ハングルとの出会い

ハングルとの出会いについて初めにお話しします。出会いは、高校生の時に観た『愛は国境を越えて』という映画です。朝鮮戦争の時、韓国に残った日本人女性が戦争孤児たちを引き取り、面倒を見ながら自分もその子たちによって助けられるという、永松カズさんの手記を映画化したもので、その中でスクリーンに現れたハングルがとても印象的でした。

1974年に早稲田大学に進み、大学では留学生の日本語学習のお手伝いをするというサークルに参加しておりました。1年生の夏休みにそのサークルの縁で日韓の学生会議のような合宿に参加しました。合宿には韓国語の先生も参加されていて、毎日基本のハングルの読み方から「カムサハムニダ」といった挨拶言葉などを教えてくださいました。合宿に参加していた韓国の学生を相手に使ってみたときの通じた喜びは大きかったです。言葉は生きているのだ、言葉が通じる感覚は面白いと思うようになりました。



講師の長友英子氏

その後大学2年の春、当時の早稲田大学語学研究所で韓国語の初級、中級と同時に受講し始めました。講師は大江孝男先生と大村益夫先生のお二人で、大村先生の中級の授業は『チョングブリ（青ガエル）』という韓国の民話を訳すというものでした。韓国語を学び始めて間もないため、辞書もきちんと引けず、どこで言葉が切れているかも判らない状態でしたのでそういう授業をとるのは無謀だったわけですが、他の大学にも行ったりしながら、なんとか脱落せずに終えることができました。この学習は貴重でした。大学在学中は、アルバイトをして資金をためては夏休みに韓国に一月滞在して、学んだ韓国語をあれこれと実践し、秋からまた大学で学ぶということを繰り返して過ごしました。

大学卒業を前に、国際ロータリークラブの留学試験の案内が

目に入り、韓国への留学を応募して、奨学金を得ることができ、1978年に韓国ソウル大学に留学しました。

韓国留学は1978年の春から3年間、朴正熙（パク・チョンヒ）政権の最後の時期と重なります。朴大統領暗殺があり、ソウルの春、光州事件と韓国の激動の時代で、周りの韓国の学生の中にはそうやってデモに参加した人もかなりいましたが、一方で、政治的な激動とそこに住んでいる人間の淡々とした日常というのは、また別にあるのだということも実感しながら、私は修士論文を書いて卒業するといった形で韓国の留学を終えました。

2. 韓国語通訳第一世代として

韓国での留学を終えて帰国してから、日本の大学院に入り直し、そこに籍を置きながら1981年、外務省関連団体である国際交流サービス協会の通訳として初めて仕事をしました。主に随行通訳を務め、来日した報道関係者などについて行き、逐次通訳をするのですが、訪問先で時間に追われることもあり、ある時にはウィスパリングで、ある時は同時通訳のまね事のようなことをすることもありました。今考えるとこれらのことが同時通訳のトレーニングの場だったのかという感じがします。

一方、通訳の難しさを痛感する出来事もありました。伝統芸能の放浪芸について同時通訳したのですが、言葉の速さもあり、韓国の伝統芸能についての知識のなさ、もしかしたら日本の伝統芸能についての知識のなさもあったのでしょうか。韓国語から日本語への通訳の難しさを痛感しました。外国語から自分の母語に通訳するというのは、聞き手には聞きやすいかもしれませんが、しかし、正確さという意味では大変個人差があるものなのです。

80年代初めのこの頃は、少しずつ日韓交流が増えてきた時期でもあり、外務省職員だけでは通訳の手が足りず、誰かほか



日韓の通訳養成機関の歴史についてもお話いただきました。

に通訳者がいないかということで私に声が掛かったのだと思います。ある時偶然に先にお話した国際交流サービス協会の韓国語通訳の登録番号を目にしたのですが、何と私が登録番号1番で、まさしく韓国語通訳の第一世代なのだと実感したのです。

また、通訳エージェントとして歴史のあるサイマルインターナショナルが通訳人材探しを始めたのもこの頃だったと思います。放送局や大学、人づてなどで同時通訳ができそうな人を探す中で、3日間にわたって開かれる大規模な会議の同時通訳者として声をかけられました。同時通訳者が12人必要だということで集められたのです。韓国国内では国の肝いりで通訳大学院が設置されていましたが、日本国内では通訳訓練を担う機関は当時はなく、同時通訳としてのトレーニングを受けたこともある経験者は半数もいませんでした。半数以上は自己申告や他の人から「あなたならできる!」と背中を押してもらった人でした。そのため会議通訳の結果は悲喜こもごも、なかなか厳しいものがあったかと思います。

その後、通訳者のレベルアップを目的とした勉強会が行われるようになり、通訳技術を磨いたり、悩ましい訳語について、他の通訳者とすり合わせなど行う場をもつことができました。この勉強会は大変刺激になりました。

3.訳語について

訳語を選択する際、日本も韓国も漢字語を使うため、「八方美人」や「遺憾」、「愛人」など、どうしても母語に引きずられて意味のズレを認識できないこともあるため注意が必要です。この他にも注意すべき訳語についてご紹介します。

6자회담という韓国語があります。日本語に直訳すると「6者会談」となりますが、定訳を決めている放送局では「6カ国協議」と訳してください、ということもあります。同じ放送局で4、5本のニュースを二人の通訳で担当することのある放送通訳では、最初の通訳者が「6者会談」と訳し、同じことをもう一人が「6カ国協議」と訳すと、視聴者はそれぞれ違うものと思ってしまうので、徐々に訳語が統一されていくのです。

会議通訳の中で、特に首脳会談では神経を使うことが多いです。首脳会談では、予め発言要領が作られることが多く、一字一句、「てにをは」一つにもいろいろな意味が込められているので、通訳する際に言葉の流れが変だと勝手に変えることも、なかなかできません。

「よろしくお願いします」、日本では挨拶代わりによく使いますが、これも要注意です。韓国語訳は、「チャルプタカムニダ」となりますが、これは相手に本当に頼むときだけ使うため、挨拶代わりに使ってはいけないと指摘されたことがあります。

ペ・ヨンジュン氏が初めてNHKの番組に出演した時に通訳として同席したのですが、番組の打合せの際に日本側が、「よろしくお願いします」と言ったところ、ペ・ヨンジュン氏は「お任せください」と日本語で言ったのです。日本語では「こちらこそよろしくお願いします」というのが想定されるところですが、韓国語の「チャルプタカムニダ」はお願いの言葉であり、お願いされた立場からは当然「お任せください」と返すことになるのです。



講演会後の懇談会では来場者の方々からのご質問に答えさせていただきました。

4.良い通訳のために

良い通訳をするためには何が必要かよく質問されます。まずは語学力そしてなによりも知識でしょうか。例えば近年、医療分野の会議なども増え、日本語でも知らない医療用語がたくさん出てきます。また、韓国の医師たちは「てにをは」の助詞以外は英語ということもあるため、英語もカバーしなくてはなりません。壁は高く厚いですが、専門的な知識があれば、通訳としての強みも発揮できますので、知識も非常に大事になります。

それと事前に資料を入手したり、入手できない場合はできる準備をすることです。通訳は事前準備の如何で成否の8割が決まります。資料が用意されない時には、過去の発言記録や書かれたものや音声を探したりもします。音声は大切で、ひとそれぞれ話し方が違います。特に地方の方言などになると、途端に何を言っているのかわからなくなることもあるので、音声があれば、その人の話し方に慣れるという形での準備もできます。最近、朴槿恵大統領の弾劾判決の放送通訳をしました。前もって検察発表の大体のポイントを調べたり、盧武鉉大統領の弾劾裁判の際の資料や今回の関連判決など取り寄せ、訳語もちょっと考えてみたりといった準備をしました。しかし実際には、女性裁判官がものすごい速さで判決文を読んだので、追いついていくのがとても大変でした。

もう一つは、発言者との信頼関係が作れる否かです。少なくとも相手と敵対してはいいい通訳はできません。「資料を出してください」「なぜ出してくれないのですか」としつつく言っていると、険悪になることもあり、うまくいきません。「お互い同じ船に乗っています。私たちは運命共同体です」と言うとかってもらえることも多い気がします。相手に対するリスペクトの念を持って良い関係を作るというのも現場ではとても大事かと思っています。

PROFILE

長友 英子（ながとも えいこ）

早稲田大学卒業後、韓国ソウル大学大学院に留学。筑波大学大学院博士課程で、韓国の教育制度史を研究。2006～2007年度NHKテレビハングル講座講師、2011年4～9月NHKラジオ毎日ハングル講座講師を務める。現在、NHKBSの放送通訳、首脳会談など会議通訳として活躍中

新たな一步を踏み出した

2016 年度日本教員訪韓団（第 2 団）参加者
宮崎県立みやざき中央支援学校 教諭

門下 祐子

「歴史はそんなに遠くはない、みなさんの近くを流れている」

釜山近代歴史館で見た映像の中にあった言葉である。今回の訪韓を通して、最も強く印象に残った言葉だ。私は、これまで生きてきた中で、日韓の歴史や政治について、ほとんどよく知らなかった。そんな自分を恥ずかしく思うとともに、今回、日本教員訪韓団に参加できたことを幸運に感じた。見るもの、聴くもの、全てが新鮮であり、毎日が刺激の連続で、よく眠れないほど興奮した 10 日間を過ごすことができた。

私は、特別支援学校で、様々な障がいのある児童生徒の指導や支援を行なっている。今回の訪問日程では、特別支援学校の視察は予定になかったため、無理をお願いして、小・中・高校全ての特殊学級（日本では特別支援学級）を見学させていただいた。特に、小・中学校では、直接、先生方との意見交換もできた。



小学校の特殊学級担任の先生と筆者（写真左側）

どの支援学級も、キッチンやパソコン機器等と、ゆとりのある空間が設置されており、設備面では韓国の方が整っているのではと感じた。しかし、障害者雇用が進んでいないこと、高校までが義務教育であることから、通常の学級の授業に特殊学級の生徒が参加し、授業内容を全く理解できていないように見えたこと、高校では現場実習のようなものや作業学習などは一切ないこと、そして、学歴社会のひずみから、“勉強ができる子だけが素晴らしい、その他は価値のない人間のような扱いが根深い”という実態を知ることができた。先生方は口をそろえて、「これではいけない。日本の方が、特別支援教育の面では進んでいる」とおっしゃっていた。特別支援学校は訪問していない

ので、正確なことは言えないが、韓国の支援学級についての実態が詳しく分かり、今後、日韓の特別支援教育がどのようにあるべきか、また、教育全体をどうしていけばいいかを考える良いきっかけとなった。

そして、ホームステイをさせていただいた、ソン・ジヨン先生ご家族に心から感謝を申し上げたい。ソン先生とは、一緒にサウナに入ったり、買い物をしたり、美味しい食事をいただいたりしながら、日韓の歴史認識の違いや、政治、国民性について、たくさんの会話を交わすことができた。最終日には、韓国民俗村にも連れて行っていただき、「祐子さん、せっかくだから、民族衣装を着なさい!」と言って、私に素敵なチマチョゴリを着せてくださった。私の将来についての相談にも乗ってくださり、一生忘れられない、素晴らしい時間をくださった。これからも、ぜひお付き合いを続けていきたい。本当にありがとうございます。

今回の訪韓前後で、私自身の、韓国や韓国の人に対する認識がものすごく変化したと思う。韓国の人々の温かさ、勤勉さ、国への愛国心、もてなしの心に触れ、韓国のこと、日韓の歴史をもっと知りたい、詳しく学びたいと感じた。

この素晴らしい体験を機に、自分の新たな一步を踏み出せたと思う。



ホストファミリーのソン・ジヨン先生ご家族と一緒に（右端が筆者）

PROFILE

門下 祐子（かどした ゆうこ）

宮崎県立みやざき中央支援学校高等部勤務。障がいの有無に関わらず一人一人が自分の持てる力を発揮できる共生社会の実現に向けて、障がいのある生徒の部活動（バスケット）の指導や性教育推進に力を入れている。

一人として関わる大切さ

2016 年度日本大学生訪韓団（第 1 団）参加者
公立大学法人国際教養大学国際教養学部 2 年

長尾 緑

私が韓国に興味を持ち始めたきっかけは大学の学生寮で一緒に住んでいたギョンヒである。彼女から、韓国の大学生の多くが政治デモに参加することを聞き、日本の大学生よりも社会へ参加している印象を受けた。ギョンヒは韓国の経済状態から、日本での就職も考えていた。韓国で起こす日本ブームの提案として「韓国人大学生対象、日本での就活観光ツアー」を考えられたのは彼女のおかげだ。

韓国語が話せる学生、日韓関係に詳しい学生、K-POP 好きの学生と、団員は皆韓国の何かを知っていた。そんな中韓国を知らない私にできることを考えた時、私だからこそ代表をしたいという気持ちが湧き上がり、立候補した。挨拶では「十人十色の人間交流」を掲げた。日本の大学生でも一人一人違って、異なる色をしている。韓国人、日本人という障壁を壊して、国際交流を超えた人間交流をしようと誓った。

一番の人間交流が出来た場面はホームステイだ。受け入れ家族は大学生のイエウンと祖父母の 3 名。イエウンは東野圭吾の本を読むほど日本語が堪能で、年齢が近いもあり、話が途切れ無かった。言葉が通じないことを心配していた祖父母の 2 人は太陽のような笑顔で私を迎え入れ、日本語の名前で自己紹介をしてくれた。

事前の講義から 2 人が日本の統治時代を生きていたことは想像していたが、いざ歴史の足跡を目の前で感じる衝撃は大きかった。私を驚かせたのは、ハラボジが占領下当時 13 歳のことを覚えていたことである。学校では朝鮮語は禁じられ、うっかり話すと先生から竹刀で叩かれたこと。信仰に関わらず神社へ参拝し、頭を下げなければなかったこと。撤収、気をつけ、君が代、如何にも日本の統一時代と関係する単語が次々と飛び出た。

一日目の夕食後、ハラボジとイエウンは近くの教会へ連れて行ってくれた。私は無宗教かつ、韓国語は理解できないため歌詞の意味はつかめなかったが、ハラボジの歌う姿を目にし、聖歌に耳を傾けていると、朝鮮時代のことが胸に浮かんた。信じるものを曲げられ、名前を塗り替えられる時、どんな気持ちになるのだろう。そしてそのような経験をしながらも、解放後初めて関わる日本人である私を受け入れてくれる、彼らの深い心と向き合えたことに、贖罪と感謝が混ざり合った想いで心が溢れ、涙が流れた。

昨晚の気持ちを、エネルギーに替えると決めた私は、翌朝共通の話題を模索した。料理好きな私はハルモニにレシピを聞き、似ている日本料理を紹介した。食後に出されたシッケという飲み物は、甘酒と似ているが、麦の汁を使う違いがある。ハラボジと音楽の話をすると、「アリラン」を歌ってくれたので、私も「空と君のあいだに」を歌った。歌詞が飛んでしまったことが可笑しく笑いだすと、皆も手を叩いて笑ってくれた。国籍、言語、

世代、文化、何もかも違っているように見えても、同じ人間。こんな小さなことに、あんなにも大きな笑い声をあげて笑顔になっている。なんて幸せなのだろうと心が温かくなった。

知らないものに触れる時、人は少なからず恐怖を感じる。訪韓前に他の参加学生と気が合うか、年の離れた家族と関われるか不安だった。しかし実際に顔を合わせ、言葉を交わし、心を通い合わせることによって、相手を知り、自分と重ね、共通点を見つけて親近感を持ち、相違点を見つけて興味を抱く。団員とホストファミリーを大切な存在だと思えるようになった。ただ怖いと思っていた北朝鮮は、ガイドの学生さんが離散家族の話をし、戦争のために家族が引き離された心苦しい出来事に胸を打たれ、印象が変わった。知らないからと表面だけを見て、相手を異質と判断すると、関係性は悪くなるばかり。せめて自分と同じ人間だという簡単な共通点を意識し始めることによって、相手を見つめ、自分をさらけ出す努力ができるのではないだろうか。

日韓における慰安婦問題をはじめとし、世界中に国同士の隔たりができています。残念ながら、今の私にはそれらの国際問題の解決方法は浮かばない。しかし今回の訪韓団を通して、改めて、他人と自分は同じ仲間であるという前提を基に関わり合うことが、二国間の関係性を構築するはじめの第一歩になるということを確認できた。まずは普段の生活で関わる人を一人一人尊重することを大事にしたい。そしていつか私の姿勢が周りの人々の姿勢に影響し、人と人、国と国がお互いを認め合うことが出来るような社会へ近づけていけたらと願う。



ホストファミリーのみなさんと一緒に（左側が筆者）

PROFILE

長尾 緑（ながお みどり）

国際教養大学国際教養学部在籍。幼少期から英語に触れ、国際交流に興味を持つ。大学学生寮では Resident Assistant として、面談やイベントを通し、正規生、留学生の生活をサポートしている。今年の夏からタイ王国のカセサート大学で一年の交換留学を予定している。

滞日本抄 -旧帝国で過ごした五ヶ月の記憶-

大邱大学校基礎教育大学招聘教授

鄭惠英

フェロー研究紹介のページでは、各分野の日本研究、韓国研究をされている若手研究者による様々な見解や研究結果をご紹介します。今号では、2015年度に訪日フェローとして「植民地期西洋探偵小説で発見される二重翻訳の意味」をテーマに研究された鄭惠英氏の研究内容についてご紹介します。

1. 異質感の根拠

日韓文化交流基金フェローシップで東京を訪れたのは2015年4月であった。東京はすでに桜が散り、初夏が始まっていた。そして一夏が終りを迎える8月末まで滞在した。東京にいた5ヶ月の間、特に用事がなければ大学の図書館に行き資料を探し、本を読んだ。時々図書館の外に出てベンチに座り、学生たちが集まってコーヒーを飲みながら談笑している姿を見守ることもあった。私は異邦人であり、彼らが使用する言葉、飲み物、服装、静かな話し声までその全てが見慣れないものであった。この異質感は異邦人の大多数が感じる一般的な感情とは、少々異なるものだった。羨望と怒り、萎縮感のような様々な感情が妙に混ざりあったものであった。

私は帝国と植民地の境界線上に位置していた植民地時代の朝鮮作家たちについて研究してきた。留学を通じて日本帝国を経験した朝鮮作家たちの人生を辿っていると、いつも同じ壁にぶつかった。帝国と植民地の間には巨大な溝があり、大多数の朝鮮作家たちがこの溝を克服できないまま死に至った。その死を覚えていた私にとって日本は外国、それ以上の国であった。そういうわけで、日本という空間に入る瞬間、自分でも気付かないうちに植民地時代の朝鮮作家たちへ過度に感情移入してしまったのは当然のことであったともいえるだろう。

日本に滞在していた間、常に私を捕らえていたあの妙な異質感の大部分はここに由来していたものであろう。しかし5ヶ月間の日本滞在のおかげで、100年余り昔の朝鮮作家たちの挫折と絶望、意識の分裂がどこから由来したものなのか、その実態をある程度は把握することができた。旧帝国の力の痕跡は日本社会のいたる所に広がっていた。遠くへ足を伸ばす必要もなかった。図書館の書架にある明治、大正時代に発行された雑誌や西欧の小説の翻訳書の題名を見るだけでも十分であった。その力を実感することは、衝撃的で興味深いながらも憂鬱な経験であった。

2. 旧帝国で金来成と出会う

「江戸川乱歩のような探偵小説家になりたい」。朝鮮唯一の探偵小説専門作家の金来成（キム・ネソン）は1936年3月、この願いを胸に朝鮮へと帰国した。彼は早稲田大学在学中に朝鮮人としては初めて、日本の探偵小説専門誌『ぷろふいる』の文芸懸賞募集に入選するほどの実力を認められていた。しかし帰国時の誓いとは異なり朝鮮での探偵小説の創作は上手くいかなかった。『ぷろふいる』文芸懸賞募集入選作だった「探偵小説家の殺人」を朝鮮語に翻訳し、朝鮮の日刊紙に連載したものが朝鮮で発表した彼の初めての探偵小説だった。これもやはり、原作を直訳したものではなく改作したものであった。



金来成（1909年-1957年）

この小説に対する朝鮮文壇の評価はシビアなものだった。朝鮮の有名な小説家であり、文学評論家の安懐南（アン・フェナム）が「本格的な探偵小説だと認めることができない」と酷評したのである。金来成は「探偵小説家の殺人」に続き、『ぷろふいる』に発表したもう一篇の探偵小説「楕円形の鏡」を朝鮮語に翻訳し発表するが、これもまた良い評価を得ることはできなかった。一体何が問題だったのであろうか。早稲田大学でドイツ法学専攻者としての社会的な成功も諦め、探偵小説家になることを選んだ金来成であった。その上、朝鮮と異なり、長期間にかけて探偵小説の実績が積み上げられた帝国の文壇で認められた金来成であった。



『朝鮮日報』に連載された金来成著『假想犯人』第1回（1937年2月13日）

一体何が問題だったのであろうか。少なくとも金来成自身は何が問題だったのかわかっていたようだ。日本語で創作された探偵小説を自身の手で朝鮮語に翻訳する際に、推論過程を大幅に減らし、恋愛話を過度に追加するなど、かなりの改作を行っていたためだ。このような改作を見ると、朝鮮評論家の酷評は当然のことであった。にもかかわらず、金来成は改作を行った。なぜか？ 答えは簡単だ。朝鮮の読者たちは探偵小説ではなく、恋愛小説を望んでいたためだ。文盲率が相変わらず80パーセントに至り、科学的発展がまったくなかっただけでなく、初等教育さえまともに為されていなかった朝鮮の現実でこれ以上何を望めたというのだろうか。

以降、金来成は何編かの怪奇小説を創作し解放を迎える。そして解放された韓国で恋愛小説の作家として名を広め、49歳で突然その人生を終える。植民地時代を経験した80代の韓国人に金来成を知っているかと尋ねると、答えは常に同じだ。「ああ、感性的な恋愛小説家」だと答えるのだ。彼らの中で金来成が韓国で最初の探偵小説専門作家であり、植民地時代の日本の文壇で認められるほど、卓越した技量を持つ探偵小説家であったということを覚えている者は、一人もいない。金来成は植民地と帝国、前近代と近代の深淵ともいえる溝を克服できなかったのだ。それは金来成だけの悲劇ではなかった。帝国を経験し、近代を熱望した全ての植民地朝鮮の新青年たちが等しく経験した人生であった。植民地の現実の中で、果たしてまともな人生を維持できた者がいだろうか。

3. 旧帝国を去りながら

日本に滞在した5ヶ月間の研究はこの延長線上で進められた。イーデン・フィルボッツの『The Red Redmaynes』が「赤毛のレドメイナー家」という題名で日本語に翻訳され、金来成が日本語の翻訳を底本に「紅髪レドメイナー家」という題名の朝鮮語に重訳する過程での変化を調べるのが私の研究テーマであった。結論は同じであった。原作を直訳した日本語の翻訳とは異なり、朝鮮語への翻訳過程では多くの省略と変形、歪曲が為されていた。推理小説の核心といえる推論過程が省略され、恋愛のストーリーが強調されていた。

これは朝鮮の読者たちの意識水準が、推論という複雑で難解な過程を受容でき



金来成訳『紅髪レドメイナー家』(1940年)

るほど合理的に構造化されていなかったためだ。この違いを確認するのはそれほど楽しいことではなかった。これは植民地朝鮮の素顔を見るようなことであった。この研究を行った場所がまさに旧帝国の首都であり、そのためその違いがより一層鮮明に感じられるよりほかなかった。しかし一方で、研究を行った場所が旧帝国の首都であったため、100年余り昔の朝鮮人作家たちの絶望と挫折、そして人生への熾烈な意思を目にするように生き生きと感じ、理解することができた。

金来成だけではなかった。韓国近代文学を開いた李光洙（イ・グァンス）、金東仁（キム・ドンイン）をはじめ、朝鮮最初の新女性作家の羅蕙錫（ナ・ヘソク）にいたるまで植民地時代の朝鮮近代文学の作家たちは、帝国と植民地、または近代と前近代の溝にはまり悲劇的な人生を迎えた。探偵小説家になりたかったが通俗恋愛小説家として急死した金来成。近代的な世界を熱望したが「親日派」の汚名を被り、不幸な死を遂げた李光洙。朝鮮の与謝野晶子を夢見るほど、優れた才能を持ちながらも市立療養院で行旅病者として寂しく死を遂げた朝鮮最初の新女性、羅蕙錫。彼らは皆、帝国と植民地間に置かれた近代と前近代の巨大な距離を越えることができなかった。しかし彼らはその距離が作り出した遥かな絶望感の中でも絶えず文を綴っていった。

5ヶ月間の日本滞在を通じて私は帝国の巨大な力の前でふらつき、倒れながらも人生を、そして文学を作っていった100年余り昔の朝鮮新青年たちの涙ぐましい意思を読み取ることができた。その意思に気付いた瞬間、私はこれ以上妙な異質感でうろつくことはなくなった。そして私を抑圧していた旧帝国のその重さから自由になることが出来た。この深い理解にたどり着けるようご助力くださった工学院大学の吉田司雄先生と慶應義塾大学国文学専攻博士課程の服部徹也君に感謝の意を表したい。そして旧帝国での滞在を実現させてくださった日韓文化交流基金にも感謝の意を表したい。

PROFILE

鄭惠英（ジョン・ヘヨン）

1964年韓国大邱生まれ。慶北大学校国文学科卒、慶北大学校大学院国語国文学科卒。博士（文学）。現在大邱大学校基礎教育大学招聘教授。

業績：『幻影の近代文学』、昭明出版社、2006年3月。『植民地期文学と近代性』、昭明出版社、2008年11月。『探偵文学の領域』、図書出版亦樂、2011年12月。『大衆文学の誕生』、ハルモニア・ムンディ、2017年2月。現在韓国大邱・慶北地域で発行される日刊紙『毎日新聞』に「鄭惠英の近代文学を読む」と題したコラム連載中。



日韓文化交流基金事業報告

本号では、2016年度第4四半期（2017年1月1日から3月31日まで）の実施事業を紹介します。

1 青少年交流事業

訪日団

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
韓国青年訪日団 (第6団)	甘英熙 (カム・ヨンヒ) 東明大学校 日本学科 教授	36	15	21	1/17~1/26	明治学院大学、沖縄国際大学、熊本学園大学、沖縄県中頭郡読谷村、熊本県（熊本市、上益城郡益城町）
韓国青年訪日団 (第7団)	金宗植 (キム・ジョンシク) 済州高等学校 校長	35	9	26	1/17~1/26	埼玉県立南稜高等学校、沖縄県立那覇国際高等学校、沖縄県中頭郡読谷村
韓国青年訪日団 (第8団)	金孝順 (キム・ヒョスン) 高麗大学校GLOBAL日本研究院 副教授	36	10	26	1/31~2/9	北海商科大学、北海道札幌市
韓国青年訪日団 (第9団)	嚴仁卿 (オム・インギョン) 高麗大学校GLOBAL日本研究院 副教授	36	10	26	1/31~2/9	北海商科大学、北海道札幌市
韓国青年訪日団 (第10団)	鄭容基 (ジョン・ヨンギ) 台章高等学校 日本語教師	36	6	30	2/14~2/23	東京都立三鷹中等教育学校、広島県立大柿高等学校、広島県江田島市
韓国青年訪日団 (第11団)	崔正奇 (チェ・ジョンギ) 大田科学高等学校 日本語教師	36	5	31	2/14~2/23	植草学園大学附属高等学校、和歌山県立星林高等学校、和歌山県西牟婁郡白浜町



韓国青年訪日団
(第6団)
熊本学園大学訪問



韓国青年訪日団
(第7団)
埼玉県立南稜高等学校訪問



韓国青年訪日団
(第8団)
韓国語を学ぶ横浜市民との150名規模の交流会でグループ別討論をしている様子



韓国青年訪日団
(第9団)
北海道民謡・舞踊「ソーラン節」体験



韓国青年訪日団
(第10団)
ホームステイで雛祭りの準備をしている様子



韓国青年訪日団
(第11団)
植草学園大学附属高等学校訪問

訪韓団

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
日本大学生訪韓団 (第1団)	松谷基和 東北学院大学教養学部言語文化学科 准教授	20	5	15	3/2～3/11	ソウル神学大学校、慶星大学校、ソウル特別市、京畿道（城南市、富川市、坡州市）、慶尚北道（慶州市）、釜山広域市
日本大学生訪韓団 (第2団)	福井譲 国際医療福祉大学総合教育センター 准教授	20	5	15	3/14～3/23	慶熙大学校、三育大学校、ソウル特別市、京畿道（城南市、水原市）、忠清南道（牙山市）、釜山広域市

日本大学生訪韓団
(第1団)
サムルノリ体験



日本大学生訪韓団
(第2団)
慶熙大学校訪問

2 理事会・評議員会開催

3月30日に平成28年度第4回臨時評議員会および第72回理事会が開催され、新評議員【佐藤俊行 国際公共放送 (PBI) 事務局長】の選任と平成29年度予算案が承認されました。

PROFILE 佐藤 俊行 (さとう としゆき)

国際公共放送 (PBI) 事務局長。1948年生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業後、NHK入社。ソウル支局長や国際放送局長、NHK インターナショナル特別主幹などを歴任。



岐阜県池田町立池田中学校 3年生17名が来所

5月18日(木) 岐阜県池田町立池田中学校の3年生17名が基金事務所を訪れました。

一行は当基金事業概要についての説明を受けたほか、当基金の春木理事から環境や貧困といった現代の韓国社会の問題についての講義を受けました。

訪問を終えて生徒たちは、「韓国は“近くて遠い国”と言われているが、両国が協力して動物を保護する活動をしている事を知り“近くて近い国”だと思った」「日本と韓国が心も“近くて近い国”になるために、イメージだけで決めつけたりせず、本当の韓国を知り、両国が協力し仲良くなれるような関係をつくっていきたい」など感想を述べていました。

池田中学校は昨年度の日本高校生等訪問団として、韓国に同校の生徒ら50名が派遣され交流を行ったほか、今年度11月に韓国からの青少年訪日団(30名)の受入を予定しています。



基金事務所を訪れ、講義を聴く池田中学校の生徒たち

2017年度 助成対象事業決定

2017年度助成対象事業には71件の申請があり、この中から14件への助成が決定しました。

●助成対象事業一覧（実施日時順）

事業名	申請団体	実施期間	場所
昭和音楽大学・ソウル市立大学校 日韓大学交流コンサート	学校法人東成学園 昭和音楽大学	2017/4/13 ~ 2017/9/13	昭和音楽大学、ソウル市立大学校
釜山・福岡の交流拡大に向けたシンポジウム（仮題）	公益財団法人九州経済調査協会	2017/5/31 ~ 2017/5/31	釜山
2017東アジア国際シンポジウム	一般財団法人東アジア総合研究所	2017/7/27 ~ 2017/7/27	ソウル・韓国プレスセンター国際会議場
日韓合同アジア支援 — 空飛ぶ車いす交流の継承	神奈川工科大学車いす修理屋 (KWR)	2017/8/5 ~ 2017/8/9	ソウル、釜山
第33回日韓学生フォーラム	日韓学生フォーラム	2017/8/7 ~ 2017/8/22	沖縄、大阪（予定）
島根県発：北東アジアの地方創生～日韓が歩む道～（第32回日韓経済経営国際学会島根県開催記念コンファレンス）	東アジア経済経営学会	2017/8/22 ~ 2017/8/24	島根県立産業交流会館（くにびきメッセ）
琉球伝統舞踊ワークショップと現代舞踊の共創 in 沖縄・ソウル	明治大学アジア太平洋パフォーミング・アーツ研究所	①2017/9/15 ~ 2017/9/30 ②2017/11/17 ~ 2017/11/20	成均館大学校、国立劇場おきなわ、沖縄コンベンションセンター
日韓交流おまつり2017 in ソウル 舞踊集団 美尾屋 派遣事業	舞踊集団 美尾屋	2017/9/22 ~ 2017/9/25	ソウル・COEXホール
日韓交流おまつり2017 in ソウル Ajigul派遣事業	Ajigul	2017/9/23 ~ 2017/9/25	ソウル・COEXホール
第2回 音楽で手をつなごう日韓交流コンサート ～障がいのある仲間とともに～	音楽で手をつなごうプロジェクト 日韓コンサート実行委員会	2017/9/24 ~ 2017/9/28	大邱・達城韓日友好館、大邱障害者文化芸術学校
of-katsue kitasono-in Korea（仮）	オフカイ	2017/11/17 ~ 2017/11/19	ソウル・Seoul Art Space Mullae box theatre
「2018年平昌・2020年東京」 オリンピック成功祈願コンサート	アイ・イー・ダブル	2018/1/24 ~ 2018/1/30	銀座ヤマハホール、東京都庁
神戸仁川芸術交流プロジェクト	C.A.P. (NPO法人 芸術と計画会議)	2018/2/3 ~ 2018/2/25	兵庫・C.A.P.展示室ほか
「21世紀の朝鮮通信使～日韓文化交流・軌跡2018」	NPO法人 暮らしと耐震協議会	2018/3/9 ~ 2018/3/11	広島県福山市鞆の浦

●2017年度訪日・訪韓フェローシップ 採用者決定

2017年度訪日・訪韓研究支援（フェローシップ）の採用者が決定しました。訪日28名、訪韓8名の応募があり、このうち訪日フェローは5名、訪韓フェローは1名が採用されました。

訪日フェロー

氏名	研究テーマ	所属機関	職位	受入機関	受入身分
高恩美	社会派シネマの遺産－日韓ニューウェーブ映画のドキュメンタリー性を中心に	東亜大学校石堂学院、東亜大学校大学院 文芸創作学科	特別研究員、博士課程修了	立命館大学 コリア研究センター	客員研究員
李鉉出	地域間人口構造の変化の政治学：日韓比較研究	建国大学校政治外交学科	助教授	学習院大学法学部	客員研究員
朴錫強	日本の金融システムの安定性に関する研究－システムリスクに関わる分析手法を中心に－	全南大学校文化社会科学大学経済学部	副教授	東京大学大学院 新領域創成科学研究科 国際協力学専攻	外国人研究員
朴正珉	「海東諸国紀」と「建州紀程図記」の同異点と継承関係の研究	全北大学校史学科	非常勤講師	九州大学大学院 人文科学研究院	訪問研究員
辛貞和	日本の北朝鮮政策と政治力学関係－2000年代以後を中心に	東西大学校 国際学部 国際関係学専攻	副教授	慶應義塾大学 東アジア研究所 現代韓国研究センター	訪問教授

訪韓フェロー

氏名	研究テーマ	所属機関	職位	受入機関	受入身分
井上直樹	高句麗遺民の基礎的研究	京都府立大学文学部歴史学科	准教授	漢城大学校人文大学 歴史文化学部	外国人客員教授



表紙写真紹介

作品写真タイトル：「新緑の旧村川別荘新館」（撮影：鬼海裕之）

千葉県我孫子市にのこる旧村川別荘新館は、西洋古代史の研究者・村川堅固によって1928年（昭和3年）に手賀沼を一望できる場所に建てられました。この建物は、村川が「朝鮮風」と表現する反りのある屋根が特徴的な建物です。（我孫子市ホームページより抜粋） これからの季節、涼しさを求めてお出かけされてはいかがでしょうか。